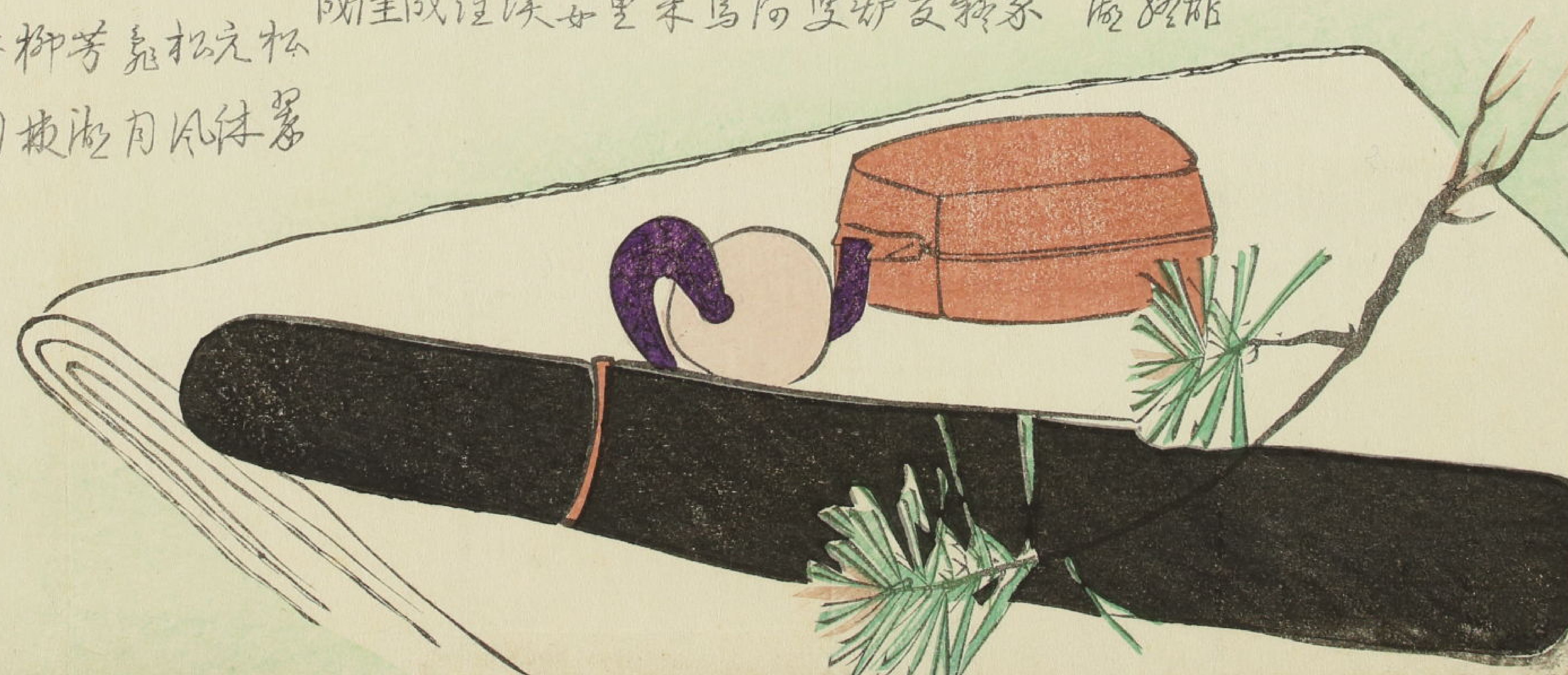
方於写

人志らぬ花ならあるし梅の花　三升郎
物の香もなき苑に咲きにけり　玉輝
若菜摘む手寺や葦のたちすがた　半海
朝起きもあさね坊さへ仕よし雪の春　恵象
山八分まで雪水をたゝえにけり　英靜
春雨や橋人さへの月影にかゝり　虚友
引くに松原　真姉
思ひ出の松竹や風雪　桃史
芝居に来てみる梅や庭の桜　文阿
雪かな降る梅の陰の花　月鳥
蕪まきて来る旅やすなはち空　吟米
白浪よする湖や芝の山　素里
初鶯眠をさます朝の新代　綾尾女
目くらの花は朧月夜　松渓
東風の香や吉野の梅　梅径
法師書き初め袖の匂ひかな　保成
駕籠に乗て碑ありし母の月　撰佳
雪にひゝく手まりの音かな　思成
初芝八十のめぐみ人の汲子将　松篆
提燈に魚のうろこや春の宿　元休
蝶の汁も口に残る二ヶ月の　亀風
芋酌みて年重ねし春の月夜　芳月
山の雲あらし酒にさそはれ　柳瀬
ふる風さへ若松の柳の影　芝内
霞の山の扇哉　石外
月細く澄や柏木の山の上　巴静
旅の手すさび倒れた物蛙　竹立
白き花かな初手に読み遊ぶ　漁友
風も雨も棟の梅の花　吾喚
猿の子も手毎にくひ入れ　蘿雲
雀子や葉さへ落ちれる梅花　言之
女中も火を入るゝ夜の雑子　茄言
寒かりける扇しらへや春の月

明治六年の春